

# ❖❖ 入園時保育に望まれる、保育者への支援 ❖❖

川辺尚子

子どもにとって幼稚園に入園するということは、大きな集団の生活を初めて経験することであり、新たに会おう人たちとの関係や園環境において多くの混乱や葛藤を経験します。

入園時保育（入園より一年間）では、このような混乱や葛藤によって、保育者の予想を超えた行動や危険な行動を繰り返す子どもの姿が時として見られます。このときには、ただ注意を繰り返すだけでは問題を解決できず、保育者がやがて「対応が難しい」と感じ、対応ができなくなることもあります。

私は幼稚園教諭として実践してきた経験上から、このような状況においては、保育者と「協働して解決する人」が必要であると常々考えていました。保育者は

できる限り注意深く観察しようとはしますが、特に入園時の多忙な状況の中で子どもを丁寧に観察し、理解することはなかなか難しいものです。

そこで、私は「子ども理解の視点と関与のしかた」に重点をおいて支援方法を検討することにしました。つまり、保育者が「対応の難しい」と感じる子どもを「発達の視点」から観察し、そこから子どもと保育者の両者に支援を行うことにしました。「発達の視点」とは臨床発達心理学的な考え方であり、①子どもの過去からの育ちの過程を踏まえた発達の生物学的理解、②子どもを取り巻く人々や環境との関係など社会・文化的理解といった子どもを理解する二つの視点と、③子どもの生涯発達を見通した発達の支援を子どもと

子どもを取り巻く人々や環境に対して行うという視点、そして、従来の支援と異なる点は、支援者も能動的に子どもに関与し、保育者と支援者が協働し、共に保育を実践するということです。

以下に、協働的に行った支援記録の流れを紹介します。

私が入園時保育に直接関与したのは、ある私立幼稚園の三歳児クラス、子ども二十六名、担任二名（担任M・三年目、補助C・一年目）でした。四月から十月までに、月に五日間ずつ訪問しました。入園式より五日目の保育後、M先生が「全員の様子が大体つかめたけれど、Rくんに関してはどのように保育をしていったらいいのか先が見えない」と、自分では対応できないクラスの子どもに不安を感じていました。そこで主にRくんに対する保育を支援することにしました。

五月の訪問初日、M先生からさらに細かな悩みを聞きました。Rくんは大便をよくもらすので、服を脱が

せてお尻を拭こうとすると、嫌がつて裸のまま走り回ってしまいます。また全員の歯ブラシを床に並べるなど、他者が不快に思う行動を繰り返し、制してもやめません。M先生がした注意に対して、Rくんがかみついたり、ひっかいたり、暴言を吐いたりするなどの行動が目立ち、接し方がわからなくなって、すっかり疲弊している様子でした。

そこで、Rくんの様子を見ると、次のような特徴的行動が見られました。

一．入園直後は視線を合わせない様子が目立ちました。集まりが始まっても遊び続け、保育者が声をかけても、まるで聞こえていないように見えませんでした。

その後、園生活に慣れてくると、他児の遊びや言葉に関心をもって笑ったり話しかけたりする場面も見られるようになりましたが、かかわり方が一方的でした。

二．他者の注意を引くことなく突然話しかけたり、

状況に関係なく「お母さんはどこですか?」「お名前は何ですか?」などの決まった質問をしたりします。ままごとコーナーによく座り込んでいますが、見立て遊びができないことよって他児とのやり取りができず、ごっこ遊びが十分に成り立ちません。

三、登園すると必ず年長児、年中児クラスを順に巡り各クラスの決まったおもちゃを集めてから自分のクラスに入ります。丸いもの、赤いものを並べたり、重ねたりします。行動や物への強いこだわりが見られます。

これらを見ると、現在、特性をとらえるために活用されているDSM-IVに自閉症の子どもに見られる三つの特徴として挙げられている「対人関係の障害」、「コミュニケーション障害」、「こだわりや興味・活動の幅の狭さ」に相当する行動だと考えられます。つまりRくんは暗黙のルールや常識がわからず、保育者に注意を受けても言葉の理解や状況判断ができず、注意を受

けることに強い抵抗を示している可能性があります。

クラスの中では、他児がRくんを避けたり注意したりする場面が目立つようになりました。M先生は「Rくんの突発的な行動を制することによって、Rくんを目立たせてしまっているのかもしれない」と、悩んでいました。

そこで私は、Rくんの特性を踏まえた支援目標を次のように立てました。

Rくんに対しては、保育者や子ども同士との遊びをとおしてRくんが周りの人たちと心地よい関係を築くこと、さらに他者が不快に感じる行動をやめられるようにすることとしました。

M先生には、Rくんが注意を受けることに抵抗を示しているため、注意を減らすように助言しました。そして暗黙のルールや状況を察することが苦手なRくんが、園生活の基本的なルールを理解し、その場に応じた行動ができるような方法を共に検討することにしま

した。

保育支援を繰り返すうちに、次第にRくんに変化が見られるようになりました。

### ①他者との心地よい関係について

ある日、クッキー屋さんのスペースでは「ください」と誰へともなく話したりしているので、「Rくんがクッキーを買いに来たよ」と、他児がRくんの存在や遊びの意味に気づけるように援助しました。Rくんも私が言葉を添えることによって「Aくんもどうぞ」と



他児を誘うようになり、Rく

んが他者とのかわりを求めていることがわかりました。

M先生に、Rくんの独り言の端々にかかわりのヒントがあることを伝えると、M先生もRくんの言葉を拾って話すことによってRくんのイメージを共有している感覚がで

たと言います。数日で一緒に遊ぶことが両者にとって心地よくなり、Rくんが「M先生」と呼び、自ら一緒に過ごすことを求めるようになりました。

### ②他者にとって不快に感じる行動について

歯ブラシを床に散乱させる行動をいくら注意してもやめないのは、Rくんが「みんなのもの」という全体を指した言葉、「床が汚い」という常識、「勝手に触らない」という暗黙のルールなどの理解ができていない可能性を伝えました。M先生は「注意してもきかない」のではなく「わからない」という点に納得しました。

言葉での説明より、視覚的な説明のほうが理解しやすいことにM先生自身が気づき、上靴の裏を見せて床が汚いことを知らせ、歯ブラシが口の中に入れる物だから「落とすのはやめましょう」と明確に伝えました。

また、大便をした後、自分でズボンを脱いでいたの

で、私が「自分で脱げたね」とほめ、「うんちが床に落ちるね。トイレにうんちを捨てようね」と短い言葉で説明するようにゆっくり話しました。Rくんはじっ

と私の目を見て聞いています。「おしりにもうんちがついているね。紙で拭く？ タオルで拭く？ 濡れティッシュで拭く？」と視覚的に理解できるようにそれぞれを見せながら、Rくんが自分の意思で決定できるように選択肢を与えました。Rくんは「紙で拭く」と自分で決めると、最後まで拭くことができました。相手が何をしているのか、また自分が置かれている状況が理解できると、Rくんは目を見て話を聞けることや自分で判断できるということがわかりました。M先生も同様の方法を取り、時どき間に合わずペランダで大便をしたり大便を付けたまま走ることがあっても、Rくんが失敗したことを気にしていると考え、いずれは解決するだろうと慌てずに対応を続けました。

M先生がRくんを理解し始めたことよってRくんに対して注意することが減り、他児が「Rくんが○○した」とはやし立てる場面でも、M先生がRくんの気持ちや行動の理由を言葉で添えるようになりました。それによつて他児もRくんの行動を気にしなくなり、

「Rくん、おもしろいから好き」という男児もおり、徐々にクラスの中でもRくんが受け入れられていきました。

今回の支援を通じてM先生のRくんへの対応が大きく変わりました。それによつてRくんもM先生を慕い、Rくんと他児とのかかわりも増えました。さらに成果を実感することができたのは、M先生の保育に、多様な姿の子どもに対する包容力が見られるようになったことでした。理解から実践への過程で、さまざまな壁に当たりながらそれを乗り越えて保育実践に大きな成果と保育者の自信が得られたと考えられます。M先生の様子を詳しく見ていると、成長するときは自らを変容させていく以下のような過程が見られました。

#### 一・保持安定の指向

「対応の難しい子ども」と感じるRくんに対しては、それまでの方法では理解ができない状況で

あつても、保育に対する使命感や責任感により自らの保育範囲の中での対応をとり、あるいは対応がとれない場合でも「対応の難しい子ども」と認識するのみの段階が見られました。

## 二、否定と回帰指向

支援者の意見が、それまでの保育観と異なる場合（Rくんの特性を踏まえた保育）は、助言を受けて試行してみますが、子どもの様子が安定した場合はむしろ特性を意識しなくても自分の保育方法で対応がとれるという意識が出てきます。

## 三、受容と向上指向

Rくんの行動の背景には、Rくんのもつ特性があり、その特性の理解が充分になされないと対応できないことが繰り返し確認されます。理解した上で次第に対応がとれるようになると、自ら対応方法を構築していくようになりました。

## 四、協働性の萌芽

協働により保育者の理解範囲が広がり、支援者と

の保育が有用であるという協働性が保育者自身にも認識されました。同時に、保育者として成長できたという自己評価も高めることができました。

保育者にとって、初めは「対応が難しい」と感じる状況においても、支援者が保育者と協働しながら実践を繰り返すことで、保育者は徐々に自らの力を高めていきました。今後望まれる保育者への支援は、支援者が保育に直接関与をしながら、保育者が子どもの特性を理解し、自らの力を高めていく過程をサポートすることがだと考えます。（臨床発達心理士）

## 参考文献

DSM・IV・TR 精神疾患の分類と診断の手引き  
American Psychiatric Association（編）高橋三郎・大野裕（訳）医学書院 二〇〇三年